

金融システム研究フォーラム 概要

第 47 回 2011.11.7 (月)

ほぼ 4 ヶ月半ぶりの開催となった今回の会合では、立教大学の Brett Clancy 氏から、同氏がこの 9 月に the University of Oxford の Modern Japanese Studies に提出し最優等賞を授与された MSc 論文に基づく報告あるいは話題提供を受けて討議した。論文のタイトルは“Lending to ‘Lemons’: Adverse Selection and the Failure of New Bank Tokyo”である。論文審査ではないし、問題設定、焦点の合わせ方や議論の仕方、用いる資料などの妥当性の評価それ自体に関心があったわけではない。論文作成過程でコメント等を求められた三輪は、「私の学生がこういうような問題設定をして来たら、立ち入った議論をしたうえで、他のテーマを捜すように助言するでしょう」といい、「新銀行東京は a tiny cottage on a house of cards のようなものだから・・・」と言って、その理由を説明した。ちなみに、Clancy 氏は日本で証券ディーラーを 10 年経験した後に、MSc 課程に入学した日本通であり、報告も日本語で行われた。

8 月 26 日に、日本振興銀行に関する「日本振興銀行に対する行政対応等検証委員会」による「検証報告書」が金融担当大臣に提出された。このこともあり、「一体何が起こったのか?」「どのような審査を経て銀行業免許が下りたのか?」「申請内容と審査の結論は妥当だったか?」「なぜ短期間に破綻したのか?」などの点について改めて議論するよい機会でもあった。新銀行東京に関する論文の報告を土台としつつ、幅広く関連する論点について話題にすることを企図した。議論は多岐にわたり、大きく盛り上がった。参加者から次々と提供された話題・内容は、大勢としては予想あるいは想像通りのものであった。しかし、その具体的内容は、残念ながら、オフレコとせざるを得ない。オフレコをルールとしなければ出せない内容も少なくなく、結果として議論は大きく盛り上がった。

「検証報告書」(金融庁のホームページからダウンロードできる)はさしたる話題にもなっていない。これを読めば、「こういうことを起こした金融庁という規制機関の責任を問うと同時に、その能力・役割と仕組み・人的構成の妥当性などが本格的な話題になりそうだが・・・」と首を傾げ、「この報告書でお仕舞いというのはいかにも日本的だね」と苦笑する読者が多いだろう。当日は、報告書の目次だけを配布した。内容に関しては私を含め参加メンバーは知らなかった。しかし、当日盛り上がった議論は、報告書の内容と大きく乖離するものではなかった。つまり、想像通りであった。

「新銀行東京、日本振興銀行のいずれであれ、中小企業向け『貸し渋り』対策(ミドルリスク市場なるものの重要性が強調された)としての役割を果たしつつ、どのようにして中長

期的に採算を取るのか？他の金融機関にできなかったことを実現する手段は何か？実現可能か？」が基本的論点であり、「申請時にそれがどのように説明され、申請内容をどのように審査し、OKと判断したのか？」が最大の話題であった。参加者はほとんど例外なく、この点に関して基本的に懐疑的であり、その理由をめぐって議論が盛り上がった。しかし、いくら議論しても「なるほど・・・」と納得するメンバーが登場することはなかった。（興味のある読者は、この点に関する「検証報告書」の内容と書き方を参照されるとよい。）

この時期、中小企業向け「貸し渋り」対策がにぎやかであった。1999年3月の公的資金導入時に各銀行が提出した「再建計画」は、「中小企業向け貸し出しの増加」を折り込んだ。しかし、需要の低迷もあってなかなか貸出が増加しなかった。貸し出し増加を強く求められた金融機関は、規制当局の勧め（強要？）もあって、スコアリング・システムなるものを活用した融資を増加させる試みを（及び腰ながら）開始した。しかし、すぐにこれがうまく機能せず「不良債権」を増加させることに気づき、この方法による融資を抑制し、公的資金の返済終了と同時に停止した。新銀行東京などがスコアリング・システムに強く依存する新しい融資ビジネスの展開を標榜したのだから、これを妥当として審査をパスしたことに、少なからぬ関心が集中したのは不思議ではない。「いかなるスコアリング・システムをどのようにして選択したのか？」「その有効性をどのようにして確認したか？」「審査側はどのように対応したのか？」「そもそも、日本でスコアリング・システムが定着してこなかった理由は何か？」「経営者を含めたクレジットスコアが日本でほとんど存在しない理由は何か？」など、話題は多方面に及んだ。

一度は取り上げたかった話題である。その契機となる話題を提供し、多方面にわたる論点をめぐって盛り上がった議論に楽しみつつ対応して下さった Clancy 氏に深謝する。